

## 飛鳥宮跡活用検討委員会(第3回)の議事要旨【概要版】

日 時：平成29年3月16日(木) 13時30分～16時30分

場 所：奈良県文化会館

出 席：委員長 田辺 征夫

委 員 櫻井 敏雄、菅谷 文則、染川 香澄、田島 公、寺西 和子、  
仲 隆裕、古瀬奈津子、松村 洋子、森川 裕一

(欠席：黒田 龍二、小林 牧、増井 正哉)

事務局 奈良県公園緑地課

関係課 奈良県 南部東部振興課、文化資源活用課、平城宮跡事業推進室  
文化財保存課

明日香村 総合政策課、明日香村文化財課

- これまで守られてきた田園の景観を継承しながらも、これからの景観をどう創っていくかという方針が必要だ。  
遺構を表示したり、堀を設けた時にどのような影響があるかを事前に明らかにするのは難しい。よりリアルに当時の状況を知りたいと思う人と、ある程度イメージを求めて来る人では感じ方に違いがあり、両者を共に満足させるのは難しいが、具体的な写真等を数多く掲示することで一定の内容は示せる。全面的に整備すると周囲の景観が隠れてしまう場合は、部分的に行う方法やバーチャルリアリティーとの組合せなども考えられる。
- 飛鳥宮跡のどこかでいつも発掘が行われていて、その様子を見ながら解説してもらえようようにすることが望ましい。また景観については、現地に行かなければ見られないような仕掛けを考えることが必要。  
さらに、あちこち見てまわるためにどのような移動手段を利用できるのかについても検討が必要。
- 必要以上の看板や掲示物は、かえって景観を損ねるのではないか。
- 景観を考える際は、周辺部の高い位置から飛鳥宮跡を見た場合、飛鳥宮跡の中から周囲を見た場合などに分類し、具体的に考えるべき。
- 薬師寺は、飛鳥時代から奈良時代にかけての景観を新たに創り、法隆寺は、千数百年前に建立されてから経年変化してきた姿を見せている。どちらを好むかは見る人次第。  
薬師寺西塔を再建するとき、西の大池から見る東塔の景色が阻害されるとして大反対があったが、今では大池から東西両塔とともに若草山焼きを写した風景が、奈良を代表する風景となっている。人間の目は、時間が経つうちに慣れてしまうらしいので、飛鳥宮跡に何かを造ろうとする場合も、景観に対する影響を相対的に判断して景色をつくるという決断をすることになるだろう。

- 飛鳥の集落の景観は、細部をフォーカスしてみると変わってしまっているが、ワイドレンズで見たら昔の景色がほぼ残っているように見えるということもある。
- 飛鳥宮跡の東北隅の塀は、掘立柱建築で、雨落ち溝が残っていることから屋根付きの複廊式であったと考えられる。宮の四隅に高さを工夫して塀を造れば、周辺の民家を遮蔽することができ、望ましい景色になるだろう。
- 古代の風景に近づけようとする、現在とは全く変わってしまうというのは、これまでも指摘されていることなので、どこで決断するかということかもしれない。
- 飛鳥の価値は、空間的な広がりがあるので、ワイドで見た時にその価値を感じてもらえるようにすることが重要だ。集落内の電柱や電線が見苦しければ、部分的に修景できるが、ワイドに見る遠景を保存し整えるのはなかなか大変で、地道にコツコツと造っていくことが大切だ。
- 役場の庁舎は、防災上の問題もあり建て替える必要がある。また現在の場所は宮の外郭にあることは確実なので、そこを役場として使い続けるのは問題があると考えている。現庁舎をどうするかも含め、今後、様々な議論を重ねて結論を出していきたい。
- 役場の屋上から東に見える岡寺の景色も重要。日本書記によれば、役場の位置は、宮中の儀礼を行った「南庭」と呼ばれる最も大切な場所。この場所をどうしていくのか、長期的な視点で議論していく必要がある。
- 飛鳥の景観は、碁盤目状の京域がなく、周りに山があって、そこに遺跡や古墳や寺院があるという点で韓国の慶州に似ている。これまで明日香村で守られてきた景観の中に、部分的に古代の景観を復元することで、全体として現代の飛鳥の中に古代の飛鳥をイメージできるようにすると考えればいいのか。
- 飛鳥全体で古代を復元するのは難しい。これまで守られてきた景観も古代そのままではないが、発掘調査をすると古代が現れてくる。それを現代にどのように調和させていくかが大切。単純に発掘して復元整備してから活用を考えるのではなく、発掘の成果や古代の史跡を活かして何ができるかというところから議論を始めている。何かものを造るためには、研究や検証なども含めまだまだ時間がかかる。全てが整うまで何もしないのではなく、その時々はどう活用していくかを考えている。
- 明日香まるごと博物館構想は、古代の遺跡や近世から現代に至るまでの景観を組み合わせ、歴史を感じられる空間を創り、未来に引き継いでいきたいという意図。住民にとって住みやすい農村の空間や子育てしやすい空間を創っていくことも必要。飛鳥宮跡も、そこで歴史上の事実があったことを見てもらえるように、分かっている範囲で具体化していければよい。長期的な目標として、宮跡とその南側の集落を一体的に整備することが望ましい。飛鳥浄御原宮の南門から南の正殿付近まで再現できないかと考えており、その一環で役場の庁舎周辺の活用も検討していきたい。

- もし飛鳥宮跡の南門やその左右の塀ができれば、歴史体験が容易になるだろう。  
飛鳥で最も再現すべきなのは、飛鳥寺の塔と飛鳥浄御原宮の南門で、これらは同じ軸線上に並んでいたの、南の正殿、前殿や南門なども復元できれば様々なイベントにも使えるし、新たな景観かつくられる非常にいい機会だと思う。
- 考古学などの研究成果に関して、唯一の結論だけでなく、様々な資料や史料がどのように研究され、どのような説が検討されているのかという研究の全体を伝えることができれば、専門家でなくても自分で考えることができるし、新たな発見があればそれを加味して新たな説をたてられるかもしれない。それが飛鳥宮跡の価値を楽しく分かりやすく伝えることになり、訪れる人それぞれが飛鳥宮跡の価値を正しく評価し決めることになる。
- 予備知識なしに飛鳥宮跡に行ってもなかなか理解するのは難しい。その場にデジタルサイネージなどで解説するような仕組みがあれば分かりやすい。
- 資料では、北東隅の塀に関して、伊勢神宮の外郭を参考にされたと思うが、春日大社のように、厚い板を縦に打ってそれを横の栈木で両側から留める様式もある。政(まつりごと)や祭祀がどのように行われ、それに伴って塀の様式がどのように変化したのかを考える必要がある。  
さらに、飛鳥時代の初めの頃の儀式として、天皇の一族の宴会がとても重要だが、そうした宴会などの様子やその変遷をバーチャルリアリティーで表現してはどうか。  
ITを活用して、現地に案内板を設置して発掘の様子や復元されたイメージなどを見られるようにすれば、説明も楽になり有効ではないか。
- 既に、スマートフォンで道端のバーコードなどを読み込んで歩いていくと、自動的に情報が入ってくるアプリがあり、東大寺の近辺でも実施されている。  
スマートフォンで使えるアプリがあれば、現地で様々な情報を得ることができるのはもちろん、大掛かりな案内板よりも安価で、情報に誤りや更新があった場合でも簡単に修正が可能だ。そういうものを大いに使うべき。
- 京都では、GPS機能を利用して案内情報などを得られる「バーチャル平安京」というシステムを立命館大学が実施している。飛鳥宮跡でも、情報地理学の知見を加え、現実に存在し見えるものに、さらに様々な情報を追加して得られるようにするのがよい。  
現在、明日香村役場の庁舎のある場所は、様々な重要な儀式が行われた広場だった。
- 正月の宴会など儀式の様子を映像で示すと分かりやすい。  
博物館などでは、アプリを入れたスマートフォンを持って展示物の前に立つと、それに関する情報が得られるというシステムが既に使われているので、そうした仕組みが使えるようになるとうい。
- バーチャルリアリティーやGPSなどいわゆるICTを積極的に利用すれば、現地に様々な構築物を造らなくても、情報が得られるようになる。これまでのような発想で単に復元整備をするのではなくて、新しい技術をしっかりと活用できるようにするための整備は

どうあるべきかと考えることが、新たな整備につながるのではないか。

ガイドンス施設についても、今後議論する必要があるだろう。最終的に何かよい案を提示できればよいと思う。

○ガイドンス施設は、観光案内所のような雰囲気の中でいつの間にか学べてしまうというようなものがよい。

○費用のことも考えると、改めてガイドンス施設を造る必要はなく、前殿など宮の建物の一部を造って有効に利用するという発想が必要だ。

これまでのように「何々をしてはいけない」ではなくて、「あんなこともこんなこともできる」というコンセプトで建物を復元し、活かすことを考えるべき。

○宮の建物をどうするのかについては、これからしっかりと検討していかなければならない。また、飛鳥宮跡は複数の宮が重なっているのので、それぞれに焦点を当てて情報の内容を充実させていくことが必要になる。大化改新が行われた飛鳥板蓋宮は飛鳥浄御原宮の下に隠れているが、これをどう表現するかといったことを、バーチャルリアリティーに関連付けて議論していきたい。

○飛鳥の歴史の一番の面白さは、朝鮮半島や中国との交流にある。今後、韓国や中国の方々との交流に焦点を合わせたイベントなども盛り込んでいただきたい。

宮の建物をどうするかについては、長期的な視点で、議論の対象として是非残しておいていただきたい。